

旭川市

井上靖記念館報

第2号

協賛：井上靖記念文化財団



疎開の地 福栄村

浦城 いくよ

昨年の創刊号で「茨木時代の父」と題して書いたのが今回は順序として、どうしても疎開の地について書かなければならない。昨年「ナナカマド」の会の方々が訪ねて下さったところでもある。

昭和二十年六月から十二月までの半年間、鳥取県日野郡福栄村（現在日南町）へ大阪毎日新聞社勤務だった父を大阪府茨木町の家へ残して母と子供四人と母方の祖母の六人は疎開をした。このおめでたい名前の疎開地のことを思い出しながら書いてみたいと思う。

福栄村は広島県、岡山県、鳥根県の県境に近いところにある。父はこのあたりのことを小説「通夜の客」「ある偽作家の生涯」や詩「高原」「野分」に描いている。



除幕式の日

昭和五十三年八月、日南町神福に文学碑が建立された。父母と私は夏休み中だった当時中学生の娘と小学生の息子を連れて除幕式に出席した。疎開から二十三年ぶりのなつかしい旅だった。

岡山まで出迎えに来られた町長さんが私たちの汽車に乗り込んで来られた。

日本で二番目の高地にある駅と当時聞いていた上石見駅で汽車を降りた。かつて、この駅前旅館で一泊し、おかずは塩だけという粗末なご飯を食べて赤ん坊を抱いたり荷物も背負ったりして峠を二つも越えて必死で皆で歩いた道はどこだったのだろうか。当日はカメラマンや取材、出迎えの方々であふれていて探すまもなく車は目的地に到着してしまっただけだ。

翌日私の子供たちが幕を引いた碑文には「中国山脈の稜線 天体の植民地」

風雨順時 五穀豊穰 夜毎の星闌干たり 四季を問わず凛々たる秀気渡る ああ ここ中国山脈の稜線 天体の植民地と書かれている。 昭和五十三年五月一日 井上靖

山田の大蛇の伝説で有名な日野川の上流に福栄村はある。当時学校へ行くにはこの日野川にかけられた手すりのない、真中に穴のあいていた怖い橋を渡らなければならなかった。強風や大雨の日には学校はすぐ休校になり、うれしかった。どういわけか転校に必要書類が届かなくて、なかなか学校へ行くことが出来なかった。一カ月位は家にいたのではなからうか。私はこの学校に四カ月ほど通った。終戦をはさんでの四カ月、多くの都市は空襲を受け大変な時期だったがこの山陰の山村は静かだった。学校では、はじめてわり算を習った。朝礼では「金剛石も磨かずば、珠の光もそわざらん、人も学びて後にこそ、

真の珠とならざらん」と今この歳になつてこそ、しみじみと分かるような、むずかしい詠を毎朝歌っていた。

現在は学校の場所も変わって「学舎百年」と父が書いた記念碑が新学舎の玄関口にある。あの恐わかった橋はどこにかかっていたのだろうか。あけびを探し歩いた山は何処だったのだろうか。



曾根の家

疎開の家は、築二百年といわれ、一人住いのおじいさんが亡くなつてネズミに食べられていたと、食べられていたと、細い道を登った途中にあり「曾根の家」と呼ばれていた。現在は「井上靖疎開の地、曾根の家、屋敷跡」という札が建っている。

家こそ取り壊されていたが、父が「通夜の客」に書いた二本杉も柿の木もお墓もあった。何十年も私の脳裏から離れなかった吾木香やおみなえしが秋風にゆられていた土手もそのままだった。

父も母も私もしばらくそこに立っていた。なつかしかった。

家には井戸がなく、四十メートル程下ったところまで、湧き水を汲みに行かなければならなかった。母は赤子を抱えて大変な苦労をした。ラジオはなく玉音放送は家族の誰も聞いていない。母の生涯でおそらく一番大変な時期であったに違いない。母の口からは今でも疎開の話は苦しかったことしか聞かれない。山にはあけびが木にからまつていた。「甘くておいしい」と食べた記憶は鮮明だ。父は疎開のために家族を送って来た時と十

二月に母の実家のある京都へもどる時に、準備の手伝いで何泊かしたのを除いて途中二回たずねて来た母はいつている。疎開の苦労は殆んど母一人が背負ったようだ。

父が亡くなった翌年の平成三年七月、母と私は十三年ぶりに疎開の地を訪れた。当時私たちが住んでいた近くの峠には文学碑と並んで「野分けの館」と父が命名した無人の記念館が出来ていた。この記念館は中国山脈の山あいの見晴らしのよい小高い峠に建てられている。父がロシアへ旅行した時、何処か郊外で見たという六角形の図書館の思い出を当時の町長さんに話したのがきっかけで、総檜造りの六角形の記念館が昭和六十年に出来たという。こじんまりとした、あたたかい雰囲気のある館



「野分けの館」

で床も檜の丸太が一面に埋め込まれている。生前の父に見せたかったと残念に思った。来館者ノートには全国各地から来られた方々の父への思いが綴られている。以来、私は何度か突然訪問したが、村の老人の朝のお掃除とともに周囲には花が咲き大切にされている。

何年前か、米子市立図書館で井上靖に関する展示が行われた。それを見られた戦後復員して来てしばらく曾根の家に住

んでいたという方から自作のちぎり絵を頂いた。自宅の居間に飾ってあったものだという。それは私の思い出の中の「疎開の家」そのままだった。あの古い家に私たちの後に住んでいた人がいたということに何よりも私は驚いた。このちぎり絵こそ野分けの館に飾っておくにふさわしいと思う。(井上靖先生)長女



日南町のしおり

自主事業の概要報告

◆文学講演会

『道北とオホーツクの文学』

とき 平成十三年五月十九日

ところ 井上靖記念館

講師 木原直彦氏

(北海道文学館副理事長)

【講演概要】

気候風土とともに人が生きる。これを描くのが小説である。北海道の場合には石炭の積出し港として小樽が急速に発展した。また、明治二年に札幌に開拓使が設置され、近代化に大きな役割を果たした。

北海道における母なる川としての石狩川をさかのぼり、屯田兵の開拓にも大きく役立った。

その一方で月形の四人たちによる道路

建設、十勝での募集移民、さらに明治四十年の鉄道の開通など開拓とともに文学においても大きな意味がある。特に、釧路では石川啄木、やがて原田康子の『挽歌』などにより、阿寒の観光ブームを引き起こした。根室においては北方の海に関わる文学がおこった。

旭川においては第七師団に関わる小説がある。徳富露花の『不如帰』が名高いし、文学碑も二カ所ある。また、井上靖の『幼き日のこと』は自伝的小説としてよく知られている。

伊藤整が日露戦争のころ松前で出生しその後旭川で生活をした。また、岡田三郎が松前郡福山で生まれたが、生家が没落したため小樽に移住した。その後、第七師団に入隊し、騎兵第七連隊の体験をもとに私小説風に軍隊生活を次々に発表した。

旭川の地形をみると道北の入口に当たるが、神居古潭の開通には樺戸監獄の囚人たちの労苦に負うところが大きい。街づくりは道づくりから始まる。ここに永山屯田兵を第一陣として上川地方の開拓が本格化した。

大雪山系の詩人群に目を向けると、常盤公園を中心に大雪山麓に記念碑が散在している。

このように、北海道の文学遺産は道産子作家と来道作家とに分けることができる。来道作家のよいところは、北国という異風土に目を向けて意欲を燃やし、よい作品を残している。

オホーツクの地は北海道の文学上の処

女地といえる。特に、北オホーツクに期待したい。オホーツクは流水に閉ざされるという意味で北のロマンがある。北オホーツクを舞台にした小説はほとんどないが、紀行文の多いのが特徴である。司馬遼太郎の『街道を行く』にオホーツクが出てくる。

一つの作品のもたらす社会的反響の大きさはすばらしいものがある。

◆ロビーコンサート

井上靖の詩精神とお筆との出会い

とき 平成十三年六月二十三日

ところ 井上靖記念館

演奏者 猪狩雅楽旭氏他(箏奏者)

【プログラム】

・緑の朝

・ナナカマドの赤い実のランプ

・千鳥の曲

・雪の降る街を

文学から少し離れ、気分転換を図りました。邦楽のしっとりとした情感に触れ心洗われま

した。

プログラ

ム二つ目で

は、文学碑

文「ナナカ

マドの赤い

実のランプ

を演奏に合

わせて朗読

し、井上先

生の心に触



れました。
最後には、全員で『雪の降る街を』を歌いました。緑が濃くなりつつあるときに、『雪』に関わる歌を歌うのも、『涼』を感じて、なかなかいいものだと思えます。参加者から、
「至福のひとつでした。思いもよらず、お箏に合わせて皆さんで歌い、楽しく過ごしました」と感想をいただきました。

◆文学散歩



しおりの表紙

今年度の文学散歩も昨年度にない郊外に足をむけてみました。講師の東先生が愛別方面にも住まわられていたこともあって、この地域には特に造詣が深く、ひとことひとことになぞくものがありました。

こんな身近なところに大詩人の碑文があると知り感動しました。百田宗治は、万葉寺の住職白川了照から「安足間へ来い」と誘われ、下記の碑ができました。
【碑文】
アンタロマに來よといふ 大雪山を見に來よといふ 埋もれに來よといふ



◆親子紙芝居

「しろばんば」を観賞する会
とき 平成十三年八月四日
ところ 井上靖記念館
演出 当館職員

【演出概要】
当館の性格上、自主事業はどちらかというと大人向けに企画されてきました。そこで、今年度は子どもを対象にして夏休みの中で実施してみたいと考えてみました。

できるだけ手作りの温もりを大切に、職員のアイデアで喜んでもらえるような出し物に知恵を絞ってみました。



井上先生が子どものころ、かの婆さんと住んだ土蔵を模型として再現し、子どものイメージをふくらませる工夫をしました。現代っ子には

想像がつかない住環境であり、人間関係であったと思います。
いよいよ本命の紙芝居に入りましたが、子どもの数が大人より少なく、若干残念に思いました。
こうした特殊な生活体験が井上文学のよさや魅力になっていることを感じ取ってもらえることを願いつつ、当日を迎えました。



予定の日程を終え、参加の皆さんがお帰りのとき、上のような手作りのしおりを参加記念として差し上げました。

◆文学講座

(第一回) 夏目漱石「吾輩は猫である」
とき 平成十三年九月八日
ところ 井上靖記念館
講師 片山晴夫氏(教育大教授)

【講座概要】

漱石という名は、「水漱枕石」つまり隠棲の意味で禅の教えから取った排号。若いころは建築家を志望していたが、俳人子規に出会って、漱石を作家としてスタートを切らせた仕掛人。



漱石は常に新しいものに目を向け、新しい形式の文学作品をつくることに心がけた。すなわち、「猫」を語り手として登場させた。
「猫」を登場させることは、当時としては人間以外を主人公にしたことで驚きであった。人間とは「わがまま」だ。教師とは「わがまま」だ。といった発想。
また、「孤独」な人格形成は幼少の頃の愛情不足が影を落としているため、母親が書けないようである。

漱石文学の原液はこの「吾輩は猫である」ということになる。
(第二回) 井上靖「本覚坊遺文」
とき 平成十三年九月八日
ところ 井上靖記念館
講師 片山晴夫氏(教育大教授)

【講座概要】

井上靖は詩人として、自由にまた気ままに新しいものを見つけようとしていた。またその一方で新聞記者として、記事作成に当たり資料の調査などには十分に気を配った。



「わび」とは不要なものを捨てることにあるが、しかし「絢爛」と「質素」をも持ち合わせている。

利休の死についても謎が多い。利休における茶室は自らの死に場所を求めたとみることができる。茶室は自分自身との戦いの場であり、自分に戦う場を見つけたということになる。

このように見ていくと、井上文学は歴史小説にその典型をみる事ができる。「死とは?」「滅びとは?」「調べた文学」がそれである。

◆読書会

とき

(第一回) 平成十四年二月九日

(第二回) 平成十四年二月十六日

ところ 井上靖記念館

作品 「楊貴妃伝」

講師 秋岡康晴氏(藤高校教諭)

【読書会の様子】

今までの読書会の経過から、取り上げ

る作品を吟味した。

繁栄の極にあつた大唐帝国に、帝王の寵妃として花開き、やがて祖国の運命を大きく狂わせて崩れ散つた楊貴妃……白楽天の長恨歌に詠われてより、いつの世にも語り伝えられるその数奇な一生を中心に、安禄山、高力士、恋、刃、入り乱れて展開する絢爛たる大ロマン。

と帯にある。

秋岡先生は作品の決定後、直ちに資料集めや視聴覚資料にまでおよび、作品の理解を助ける準備に取りかかって下さいました。

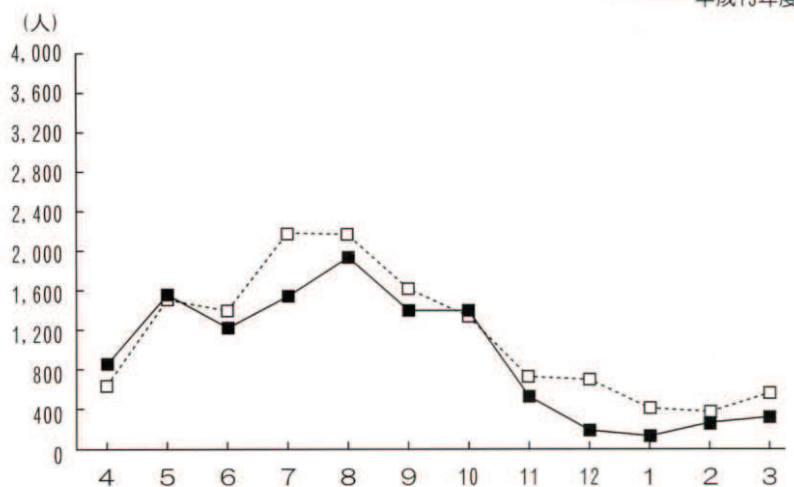


参加者から「漢詩に触れることができただ、井上文学をいっそう深めたい」「ひとりで読むのと違って楽しい」といった感想をいただいている。

この作品は長編のため、次週以降も秋岡読書会に引き継がれました。

入館者状況

----- 平成12年度
—— 平成13年度



夏の井上靖記念館



冬の井上靖記念館

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
平成12年度	638	1,510	1,399	2,175	2,171	1,613	1,329	724	688	388	382	519	13,486
平成13年度	888	1,534	1,204	1,589	1,936	1,342	1,347	540	206	193	323	348	11,450

文学散歩に参加して

神林 正 恵



七月十四日(土)曇り空を気にしつつ、市役所前より九時出発のバスに乗る。未知なるものとの出会いを思い

胸の高鳴りをおぼえる。

走行中のバスでは見学予定先の資料が書かれてある小冊子を開きながら、最初の目的地である百田宗治の詩碑について講師の東延江先生のお話を傾ける。百田宗治と安足間の万葉寺の先の住職白川了照との関わりを東先生のお話から詳しく知ることができた。

白川了照は歌人でもあり文芸に造詣が深く、中央文壇の三木露風や上野山清貢らとも交流があり、多くの文化人や画家が万葉寺を訪れ、住職だった了照との親交を深めていった中で戦中戦後の食料難の折、百田宗治が住職に安足間への移住を勧められ「安足間」の詩が出来たことである。宗治の詩碑は愛別町安足間神社の境内にあり、神社は大雪連峰に見守られ、安足間市街を見下ろす小高い場所にあった。詩碑は昭和三十四年に建立されたもので、大きな石を積み重ねただけの碑としては一番素朴なものに思われた。四十五年近くを経た今、詩碑は苔むした羊歯や露の茂りに囲まれ、木漏れ日を受けて静かに建っていた。詩碑には詩「安足間」の中の三行「アンタロマに

よという、大雪山を見に来よという、埋もれに来よという」が刻かれてあった。神社境内の樹々の緑も美しかった。葉の彩りに身を装った尺取虫が独特の動きを見せて一同を歓迎してくれていたように思えた。次に先代住職であった白川了照の万葉寺を訪ねた。境内には白川了照の歌碑があり「うつくしき仏舎利堂はオルゴールもろもろの善男善女の声しつ」の歌が刻まれてあった。又、八幡城太郎の句碑「奈良に似し山々かなし鳥渡る」が

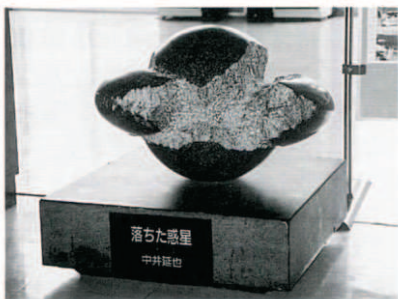


百田宗治の文学碑

あり、その他数人の歌句碑が建てられてあった。境内の一隅に鐘楼があり、鐘の面に詩句が刻かれているのを見ようと木の梯子段を恐る恐る登ったりもして、白川了照住職の詩歌に対する気の入れようの大きいなるものが感じられた。寺は現住職不在のため、仏舎利堂にある三木露風や上野山清貢の作品に触れること叶わず心残りではあったが、万葉寺が幼稚園になつていたのであろうか、入口の門の所に手作りの大きな風車三個が風を待っているのが印象的であった。

道すがら立ち寄った愛山小学校では休日のところ、前ぶれなしの訪問でしたの校長先生が吉本先生の後輩でいらしたこともあって、若い先生とお二人で快く迎えて下さった。丁度開校百年記念を祝ったあとで、その折の祝句が載ったパネルが校庭に残されており、元旭川市長の五十嵐広三氏の句「安足間は不思議な文化の吹きだまり」に目が止まる。因みに愛山小学校は五十嵐氏が初めて教鞭を取られたところであったと聞く。かつては三百名もの児童数を擁した愛山小学校も過疎化の波にのつて今は十名の児童が学んでいるとのことであった。空き教室が資料室となつていて農機具や昔を偲ばせる小道具が数多く展示されてあったし、廊下の壁には梅沢勇の絵をはじめ数

点の絵があり、校庭には中井延也の彫刻「落ちた惑星」が置かれ、異彩を放つていて「文化の吹きだまり」の言葉通り、思わぬところで文化に触れた思いであった。



落ちた惑星 中井延也

次に、当麻句歌碑の森を訪ねる。ここは当麻中学校とヘルシーシャトーとの間にある小高い木立ちの中の屯田開拓記念公園の一隅に二十四基の歌碑と句碑二十五基があった。平成三年七月当麻町開

百年を記念して建てられたもので、当麻歌人会や俳句会に所属の方や町民一般希望者の句歌碑であり、それぞれ優れたものがあつた。句歌碑の森を一巡して昼食となり、木陰を選んで三々五々お弁当を広げた。小鳥の囀りを聞きながら時折肌



に触れる風も心地よく、公園のオゾンと共に口にしたおむすびのおいしかったこと。

昼食後、一路バスは旭川へと向かう。最終目的地は旭川信金本店横にある井上靖のすつかり馴染みとなつた詩碑の前に立つ。詩碑は平成二年九月旭川市百年記念事業の一つとして建立、井上靖指定の黒御影石に刻まれている。詩碑は市民の動静をあたたく見守っているようで訪れる都度、親しみの深まりを感じるのである。

ここで、詩碑に別れを告げ散会となる。なかなか個人では訪れ難い万葉寺や当麻町の句歌碑の森で、多くのものに出会えることができ満足感で一杯であつた。講師の東延江先生はじめ文学散歩の企画、お世話下さつた方々に感謝しつつ、次回も是非参加が叶えられたらと思つた。

一年間のあゆみ

五月十五日

井上靖の資料調査
場所 東京

五月十九日

文学講演会

演題 「道北とオホーツクの文学」
講師 木原 直彦 氏

六月二日

喫茶コーナー始まる

六月二十三日

ロビーコンサート

演奏 猪狩雅楽旭氏、他

七月十二日

第一回井上靖記念館運営協議会

会場 花月会館

七月十四日

文学散歩

見学先 安足間の文学碑、他

八月四日

親子紙芝居

演出 当館職員

九月八日、十月十三日

文学講座

第一回 「吾輩は猫である」

第二回 「本覚坊遺文」

講師 片山 晴夫 氏

十月二十五日

相談役会議

場所 東京

十月二十八日

喫茶コーナー終わる

十一月二十八日

第二回井上靖記念館運営協議会

会場 花月会館

二月九日、十六日

読書会

作品 「楊貴妃伝」を読む

講師 秋岡 康晴 氏



井上靖通り

ご利用マップ



交通のご案内 あさでんバス

旭川駅前発⑤番 (所要時間25分)
1条7丁目発22、80番 (所要時間25分)
いずれも4区1条1丁目下車 (徒歩3分)
タクシー/旭川駅前から1,600円程度

〒070-0091 旭川市4区1条1丁目
Tel. 0166-51-1188 Fax. 0166-52-1740
開館時間/午前9時~午後5時
(ただし、入館は4時30分まで)
休館日/毎週月曜日
(月曜日が祝日の場合は翌日
年末年始)
観覧料/無料

平成14年度 井上靖記念館事業計画

- 5月18日(土) 文学講演会
「井上靖『孔子』と『論語』に見える孔子像」
- 6月22日(土) ロビーコンサート
- 7月13日(土) 文学散歩
- 8月3日(土) ロビーコンサート
- 9月7日(土) 第1回文学講座
- 10月5日(土) 第2回文学講座
- 1月25日(土) 第1回読書会
- 2月1日(土) 第2回読書会

詳しくは、後日、こうほう「旭川市民」またはチラシをご覧下さい。事業は全て無料です。

人事異動

退職

館長 古田 辰雄

嘱託 吉本 昌夫

嘱託 森田 由紀

在職期間中、多くの方々からご指導を賜り無事に今日を迎えることができました。心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

着任

館長 清水 蓮雄

嘱託 高島 義和

嘱託 源 圭子

前職者同様、ご指導の程よろしくお願ひ申し上げます。

編集後記

▼少雪暖冬と思われる冬も峠を越し雪の山がみるみるうちに低くなりました。

▼こうした雪解けとともに館報第二号をお届けできることをうれしく思っております。

▼間もなく向かいの春光園に子どもたちの元気な声が響きわたるでしょう。この子どもたちに井上文学のよさを伝えたいものだと願っています。

▼本年度も皆様にはお元気で過ごして下さいよう祈念いたします。